繪本豐臣勲功記

二編

四

繪本豐臣勲功記二編四之巻

目録

木下小一郎秀戦達誉名

屬君賜一字

二人衆羅木下謀歟龍臭

屬信長出馬

木下法長自殺 於塙尾攜猪

屬 襲撃情中

木下八士燒 於糧破溝門

屬 名奪 二九

信本豊臣勲功記二編巻之四

江戸 櫻澤堂山 編輯

木下小一郎初戰連叢名 屬君賜一宇

南北と知らんゆへ必ず磯石あり。風色と見んゆへ必ず慈石あり。然べ濃州と計らんゆへ行中大澤三人衆ありて。知見の遠きこと滿足せり。憲郭如とり木下ゞ計畧ゆへ。三人流もそも既ゆ。織田ゆ合躰なせし。后ハ濃州侍士我もく。と丈驕尾列ゆ心ゆ寄うり。備その策も澎く養て。水祿七策とありけるゆ。今ハ秋蘇家の羽翼と憑む勇士も驚やゝ憂へ。稼ふゆ山城とゆ。ゆ。速や時こそ來られと。木下ゞ諫も用ひざこ月上濃出馬せらるを。別役城ゆ。せらる。木下出迎ひ奉て。切覓御出馬假へども。城攻の儀ハ義過まゑ出結。ゆきと言ハた。信長御望亀と換ゞ玉ひ。ゆの恐怖とる所ゆ。ゆて厳やうに稼

豫なすべきぞ。唯一挙に攻破らんに。何困事のあるべきやと令せを木下推返し。然ながさるゝは大に違へり。早く斎藤の老臣諸士。君の出馬を知りなば。計議を設く備伍さりこれが為に味方の軍伍いかにも勝利を得ること少なし。况や城は名に負ふ当国第一の要害なる。稲葉山の絶頂にして。兵粮矢玉の貯へは十年籠城の準備ありこれをもて保る事。御心の侭にならずし。合戦年を経る時は隣国の変も心元なし。然るにより秋にもなり。不意を伐せたまひなば速功を遂しのふべし。然ども後れをとらんなれば。神速に一戦しなさて。又神速に帰陣ましませば。後方御こまることありと申すを織田殿。誠りとおもひ後の方術とは何事ぞや。然は其方術は。先ん達の降謁せし。三人衆を用ふべき。時節到来に従とし。其も彼三人は秘斎家に一族の好俱へば。龍興ならびに老臣衆。三人衆を語ふことなし。其名に関て渠併を用ひ情を地に謀計を行せ。不意に攻伐させたまひなば忽落城あるべき

なりと意趣あらかじめ演ぬる程に。織田殿漸く諾得したまひ然ば一戦を催すべしとて軍勢の手隊を定める。国の案内知たれば木下秀吉を一番とし。一千余騎にてうち発たす。二番は先鋒の右側なれば。柴田権六郎。森三左衛門。貳千余騎にて推発す。三番は池田勝三郎。佐々内蔵助。前田孫四郎。都合く二千有余騎なり。次には大将織田信長。旗本の勢二千余人。後陣は少し引さがりて佐久間右衛門尉一千余人。前後總勢九千余人。隊列凛々と推発せ。斎藤方にてこれを聞。旗本をもとして不足なりとて三人衆を催促す。稲葉は安藤氏家の三家。人数を率ひて出来り。斎藤龍興大に悦び。西方氏の加勢こそ。勝軍の瑞相なれ。今度は信長を伐捉て。先年の遺恨を消すべしと鋭気を添るに伊賀守。進出てのたまふ。栖家三人。二隊にわかれ軍配なからん胸横撿めまて。擲崩さん。厭ならばやと申すに答ふ。評議は一決なしけるとし。

是い素より二人衆織田殿と謀合せ。新剃らひ軍法なると。郡らに頼うし
濃田者さん。備前濃勢の隙構い丸毛兵庫頭長井隼人二千余騎ふて先
陣う。牧村牛之助長井藤弾正二千余騎ふて。ひた續く。目根野兵部ご二
千餘人いのうめ如く仕出う。稲葉ハ右ふ情まり勢。安藤氏ハ左ふ三頭ハ
二月艶陽の天朗なる日ふ丸毛。尾列の先陣ふ藤吉郎秀吉。逆ふ
ぐ二千余騎。敵合迫くなりうまぶ。鳥流うちうけ正魁ふ。二百余人ぶ孫
の。小大弾と揃つく。烟の中へ二無ふ。獨人ぶ。続ひて騎馬武者五百
余騎。怒濤の如く。弦発う。殘る二百の歩卒ハ。隙際くと。繰合せて。
鉄桶ふ進ぶう。こまぶさめふ秋葉家。丸毛長井の二千余騎。一ちも
さへ出して。散ふ撤出さ。我後ぶ退くと。兵庫隼人ふ
止う。迫せくとおせまぶ。耳ふも入まで。落ぬ中ふ小牧家ふと号称

うけ。大吉力うも揮只一騎。ふ斬て蒐る。有係ふ家僕まで刎ふの
像く。勝者ふる水ふ勢も。小牧一騎ふ斬起らも。四方へ飛と逃惑ふと。
蓬き自分が逃仕うる。插家が戦実のひと試よと。蜂須賀又十郎ふ
山小助。功名せんと競ひ出る。両馬の中ふさと推分ふ。秀吉の弟小一郎
今年二十五歳　今日初陣の吉ふ。敵敵ふと駆うしが。小牧が拳止ふ見るもう。
當敵こうそいと言う。鑓ふ撫て搦蒐る。小牧ハ満無ふ深手ふ。大吉力ふ
てうそう合せ。勇ふ奮て闘ふう。濃野孫兵衛こまふ見て。羊弦天の如く
紙素う。小一郎ふ鑓力ふ。藤こハ賢る勇士ふまども。ふ漸く疲まさ
れば。小一郎ふ搦仕らも。馬より撞と。落ぬらも。大勇の小牧孫ふ。濃の血
止ふ。優操ふ。力ふ信せて。ふ。ふ。此方ハ心得強ふ。敵せば。小牧磨岳ふ
倒うと。ふ力ひ死接て。跳蒐ふ。小牧が眉ふ殿隆ふ。小牧殿ふて長井の軍勢

木下小市郎
初戰み
小牧藤三
を擊

返し合せるのみにまぎれ二陣の牧村半之助長井伝弾を入替るを織田方
よりも柴田權六本下小兵衛を入て進んでゝ牧村長井こまをとんで敵業田
ごさんをまと蓑地小弥進るを勝家の方にて堪ぎ兼て堪ぎ兼て一つゞ
みゝく朝岡小軍みく惣軍をゞまを起ところへ稲葉安房氏家の勢左右
蜂惣柴田が横合小突蓑。遠間小牧村長井の勢小一町むうるを退く。
秀吉こ人亮が出るを見て敵を神勢を退せらるゝと信長小勇ゝ進
小軍を退ゝ玉ふこを小ようて勝家も。こ人亮小送られて。後敵のさゝ小見
せらけ。今ゞく測勝小退退を。こ人亮も程よく退て。軍途ろ退揚て。今日
大将信長小殿漏ゝつる朽藏さを。と城ゝ中小罵るを。腹心の將佐とおもひ
つる。秋藤の運ぞ知らをる。然ば信長小軍を纏め測後城小入らるゝ。諸
軍勢を休息さを。本下が今度の働。授羅ゝと称美ゝ。次小一番を近

く寄をこを富田戦の勇功として。敵の勇士小牧ゝ。容易殺捕得ざるを輝
比類なを勲功ありとて。諱名の一字をたまし賜り。秀長と呼せらを。一方の將と
ぞ云さををる

こ人厳義本下謀略兵屬信長出馬

仁なを則ば天こを也と責。天仁原是一神なり。敵與日夜媒酒小酔て國人
百姓の苦患を思ふを。我身の栄曜を事とをゝ。國政を怠果るとゝ。練
る輩ら重ふをく。今い義濃武士ゝ本下と信を通ゝ好を結んを懇小
譚合ふ小りしゝ。今こを宜りまを義藤宮命。謀計を密ゝ出ゝ。こ人亮へ
密使を発て。如斯ること謀合を。こ人亮いこの意を諾奥ゝ。次義藤家の
諸士と金合を。練成ゝて言ふを。近来本下とゝる者。測後小懐を
肇て濃引倍士を行攪ふこと。彼ゝ。ゝ義所ゝ。ゝまゞをめ小當城も被

盛ぜんがいのら又。藤吉郎が計らるべし。準備ありやと問さまて日根野。我儕も其儀と辛痛せり。終ども指さる思案もなければ。こ家の異見と案所らんと言ふ。さて稲葉伊豫守。進出て誇ぜるやう。今當城ふある所の名士と出して山下うら街口の際ふ俣しめ。織田勢再び推進て近邸を村と敵出せる時。自軍まきと追散さんと速ふ駈向ふ。便利りともよろべし。且さ外の老臣達も貪面くの果地をへまと任せさせば。織田勢打と洗ぬ所時ふこまと追散さば。是留のこあふ案きし城も當して功なれ故ならぬ。信長の量驚駭とも進ま得る彈偏ふまじ。さ際ふ例役と撓伐せば。織田勢ひふ別くとも御尽きて敵せあじ。敵の弱るを善人て進ぜば。清例のふ惟只一揉ふ攻崩さん。こまぞ孫吳が秘密の源源。漢家ふ屯田の良策なり。と詞と巧まを動むるなどふ者を此儀とよりとして。城中の諸士大きいふ山下御口或いまく。さまくてふ分散ふ。今まで稲葉ふ山ふ籠城せし。こ百余人と例て諸士も。老幼女子と員ふ加へて僅ふ六千余人とありぬ。備も日根野ふ貴ハ攻ふ陣営と固く続び。諸方一諸ふ暗号と定め。敵進来らば。ふの時ふもあまと。通ふ援合べ仕よ。と。叢童ふ紙朱しにり。依てこ人衆ハ意の通ふ。各方と謀徹。然して例役へ通伸せしべ。孫吉郎も又情々地ふ。両者と出て。これと探らを。偽ふらぬと得と察決。秀吉ぞ。情やふ清例城へ参上。御者ふ出て稲葉山の隊伍こ人流より内通のおもむき。落ちく言ひ。源ふ御出馬の義と紙まらせ。まべ御人員と千二こ百ばど。情こ地ふ例役へ人をを玉へふ。こまと。ふ隊して。聚こふ推伏さを置ん。さて。君ふ小臣より。若ふ為ふ。さる日限違ぞ。御出馬ありて。さるべし。備城ハ如新くこ。まぞふ釜とて大意と漢の討業ふうと意しにまべ。織田勢大ふ声と敗ち。席と去て勇ぞこ五ひ。

鬼神不測の妙術なり。奇代の智謀比類なし。とくもぐも所感あり。本下を遣
て門前まで出掛ける。そ奏らして隊伍を立て。五六百騎一千程づゝ出て
森池田坂井前田佐々左將と。密に別段へ遣はしまゝ。本下秀吉こゝに指
揮し。大將達は奇計を為し。案内者を添て懼仕させ。後こゝ衆の評へ。
淺野彈須賀を使者として。再應の計策を謀合せ。本下の自勢のうちより。事
小勢にて出る百騎。撰び出して。情びやうふこゝ元の評へつゝましる。是に因
てこゝ家の大將稲葉山へ使を発す。今宵別段へ夜襲して。城を取らんと相
まども。軍勢少くて不足に候。おそれ所加勢あるべしと。誘ひ出に就奥い思案に
も及ばず城中山下。八百余人の軍兵をこゝ元へ加勢せり。さるや深計成
勢しとて。本下が方へ告しらしめば。秀吉こゝを極に喜悦。直に清別へ使者を遣
らせ。聖天宮合と決定しこまべ。今夜中の所出陣致るべしと。注進を信ぜこ

まを所しゆされ。の・羅星の諸道も忘れ。大胆に声続き玉ひ。柴田梅丹羽
佐久間。五百有餘の軍士を率ひ。密に別段へ趣発ふ。そもそも所より本下
秀吉城門を取る。小牧山へ移さるゝ。自勢五百有余騎を領して。大將の御勢加
さうそ。勢都合一千餘人。悄く地に別段の城を打囲。遍く遍く人殺
寺山稲葉山の麓に別段。樹間行程に懼仕を。徳て別段の陣中へ。行中
半分落と殘置り。重治稲葉を出発てより。今夜まで夜攻の事に終て。
一言まで句を出さまども。本下種々の奇計をめぐらし。工夫に虚隙あらざるまで心中
大に感嘆す。且本下が殘しおき。こゝ百余人を所に別段。大勢義し。偽に
見せうけ。夜討あらばと待構へう。稲葉安藤氏家のこゝ家へ稲葉山より加
勢に来りし日根野弟兵衛が陣に参り。今夜もこゝに別段城へ攻入べきよしを
こゝに入れまで日根野兵衛が謀を。此事より紀に似るまども。苟且みぐら四郎従

氏家稲葉俤秀吉の
奇計を受て洲股の
城を奪ふ

来守軍する例幾ゐるを。容易ふ拔こと難くるべし。と稙孫の氣見を伊豫守。
鞭撻とうち笑ひ。四年已来守軍めし。城ゞ到ふ所の容くこと攻難し得ぬ
噂ふ。五年十年と来りその後。いくそゞ落しゝふさるべきぞ武士の意地として。
落さんとおもふ例後を落さで徳ふくを来んや。軍ハ来ふ信せこゝ
夜殿と決定す。日根野村を後陣としてまづ兵糧を運しこの月路
をぶる沢例幾城へ推進う。左の魁軍ハ稲葉伊豫守。右の魁軍ハ氏家
常陸介。進ゝと進るやいなや。島流うち蒐岡声を作り。只一揉ふ責落
さんと喚叫ぶ。城中ふハ行中半ら湯。こ百余騎ふて防げども思
寄ざる事ゐるふや有溢しそ見へくるを稲葉氏家の軍兵們講ふ逃入塚
ふ抱著。麓陣あらせぞ。家辺を。日根野村ゞ敗こをとりて。逃て投らんと囲まども。
二人衆の兵士ふ遮らま。見ん物してぞ勧へくる。左右ふ稲葉氏家の魁軍迷

城中ふ雑入て。諸當標を推ゝ。こゝと。途と言ふ。日根野兵衛ハ後
陣として。山中ふ勧へゝ。居ゐら待ハ心のとゝ。勢を領ちて助らんと。
的ら。弥次右衛ハ五百余騎例幾をく進んゝ。日と城中を睨ハ已遠
城を案ひと見へ。ところゞふゝる強い稲葉氏家の兵号つきゝ。弥次
右衛ハこを。強く。ハ愚き軍ハ悦び。城中ふ入て軍を賀ス。然ねどふ秀吉ハ
大将と共ふ陽秘寺山の陣ふあゝ。例後の体を覧ゝ。事ゐ成ぬと皆
ゞし。ふ時分ハ。ゝと。ふ嚴ふ。号の旗を立。ひとゝ。遠様形蓑ふ埋伏
ゐる。尾別勢の八百余騎ふ。濃侍士六千有餘。そのうへふ例後
を。の地下人們を。都合一万四五千。八方より蜂起。弥蒐勢の兵散ゝ
離ゝ。ゐれふ固める。山下街口の隊伍。ものゝ。多。兵大義を射蒐。うち蒐
蹙ふ。せんと攻起るに。思ひらざる事ゐ。ものを拒抗ふ方術を失ひ。一ゝ

女へぞ。退き備をそなへ吁怖しや四方八面山々谷々野も綿も問の声充満して。本能のむらさい正本の如く。三勢数千万余騎ゆゑ日月もうせさきぬべきかとて。國中寸地も織田勢の。鬨声せぬ所もなきまゝ一端本丸ゆ退入て。後の事とて慌忙き。城ゆ投らんとする所を。此よ彼と埋伏せし。織田勢一時ゆ討て出途を塞切て攻るにぞ。殘いまゞ寅の下刻なまゝ。池新藤ゆ雑とも紛まぎれ自軍を他軍と見惑ふまゝ。敵と將佐と見違へて。駆く車も駆く。進退こゝに極つゝ。ものひくゆ落失うり。備又日根野備中守い山中の陣ゆ来うしゝ。不意の事ゆ驚き慌ゆ。人流より屬置こる。八百餘騎の兵軍も。こる落失て方後なれゆ二三千人ゆ過ぎうるまゝ。山中の陣をゝ引掃ひ城中へ入て防げんと稲葉山へ退さんとする。路前ゆ突と問着を作て。右の方の林中より。池田猪之助・坂井右近。二千余騎ゆて突出を厥第大事の敵ありと思ふ間もなふ右の方より。森三左衛門・前田孫四郎。二千余騎ゆて来うり。續て佐々内藏助・滝川生羽守二千餘騎。その外當國の侍士俠。いの信長へ降りしゆや日来見熟し。猛獲変梅津猪猛二巳の雑馬を押立て。その勢おうゝ一第四五千。猛火の燃る勢して日根野一將と當敵ぞと。せ二せこゆ攻進まゝ面を向べきやうもなし。朝ゆ前へ繰沼より。大澤治部右衛門重時。五千余騎ゆて斬て出。別張城と稲葉山の間ゆ隊伍を立てまゝ。こゝ人流ゆ隊ゆ屬せし。牧村平之助・日根野弥次右衛門。なる遮らまて火急ゆ。敵ふ方優と矣ふうり。備織田數い瑞龍寺の山と陣どりまして。本下秀吉い山下ゆ。ありて不ぐの民家ゆ放火し。種く方御と構りまゝ。備中守も奉じて漸く城門へひき入りまゝども。敵ゆ本下ゆ兵士輩ゆ。こゝ人流の軍兵と自

織田勢濃州ゟ
充満しく
日根野
牧村併を
駆うむ

軍のうち（混）（さまべ）山路の案内（あんない）とこまらかさせ。遂（とげ）かた糧（りょう）とこゑ（こえ）し。庫の構（かまえ）ふ推進（すいしん）て奉行（ぶぎょう）人と斬捨（きりすて）し。兵粮（ひょうろう）残（のこ）らず奈（なし）ふ。且又牧村牛之助（まきむらうしのすけ）日根野（ひねの）弥次右衛門（やじうえもん）の支（ささえ）将（しょう）稲葉山（いなばやま）の煙（けむり）と視て。引返（ひきかえ）んと。途中（とちゅう）大深彼（おおぶかかの）遠（とおく）らま。死力（しりょく）と出（いだ）して斬抜（きりぬけ）くこと後僅十騎（のこりのこるじっき）ばかり。散々（さんざん）に乗（のり）て通（とお）る。稲葉山（いなばやま）の城内（じょうない）へ退揚（たいよう）ること。ふ固（かた）てこと人衆（ひとびと）も。今（いま）別（べつ）段（だん）ふ用（ようい）しと。静（しずか）ふ測（はかる）の様（ようす）と出（だす）。瑞龍寺山（ずいりょうじやま）の織田勢（おだせい）。こ将（しょう）一隊（いたい）ふ加（くわ）もうこう。信長（のぶなが）大ふ悦（よろこび）玉（たま）ひ。まづ。こと人と近（ちか）く召（めし）て。屢賞（しばしば）ふ決（けっ）せらるまし。こ将（しょう）ふも。ふ詞（ことば）とそろへ。遠遣（とおやり）のまことらさども。全く俺倚（おれよる）ば功（こう）ふ。あらず。君（きみ）ふ言運（ことはこび）本下（もとした）の智謀（ちぼう）ふ。小當（こあたり）まるも（ふて）。唯（ただ）このこと人（ひとびと）ふ只管（ただすら）ふ攻口（せめくち）の一隊（いたい）と。ゆるさせ。九鬼（くき）と望（のぞむ）ふ信長（のぶなが）。せん熟（じゅく）ば城責（しろせめ）の各隊（かくたい）とをさんと隊伍（たいご）の次第（しだい）と定（さだ）めるあ。軍（いくさ）の吉例（きちれい）とて。一番（いちばん）ハ柴田権六郎（しばたごんろくろう）勝家（かついえ）。二番（にばん）ハ稲葉安藤氏家（いなばあんどううじいえ）。三番（さんばん）ハ池田勝三郎（いけだかつさぶろう）森三左衛門（もりさんざえもん）。四番（よばん）ハ坂井右近（さかいうこん）前田孫四郎（まえだまごしろう）。五番（ごばん）ハ佐々内蔵助（ささくらのすけ）抹茶八郎（まっちはちろう）。六番（ろくばん）ハ中條小市（なかじょうこいち）。名古屋弥五郎（なごやごろう）。七番（しちばん）ハ村井長門（むらいながと）。林佐渡守（はやしさどのかみ）。八番（はちばん）ハ蒲田右近（かまだうこん）。九番（くばん）ハ青山忠右衛門（あおやまちうえもん）。十番（じゅうばん）ハ大深次郎左衛門（おおぶかじろうざえもん）。木下藤吉郎（きのしたとうきちろう）秀吉（ひでよし）。

彩のごとく十隊（じたい）ふ龍蛇（りゅうだ）と像（かたど）て備（そなえ）とて。稲葉山（いなばやま）の本城（ほんじょう）と攻落（せめおとさん）と躋攀（せいはん）る。此時稲葉山（いなばやま）の城中（じょうちゅう）ハ。大将（たいしょう）右兵衛尉（うひょうえのじょう）人数（にんじゅ）ふ。総奥（そうおく）。彩（さい）ふ。あらんと思（おもい）ひ。寄（よせ）らず。出（いだ）ス人衆（ひとびと）の動（うごき）ふ。城中（じょうちゅう）の兵（へい）と。東西南北（とうざいなんぼく）ハ領（りょう）ス防禦（ぼうぎょ）と固（かた）くしつ。今（いま）ハ砌（みぎり）。気煩（きづかい）と心緩（こころゆる）とを士（し）と。緩（ゆるめ）ふ。盤嶽（ばんがく）ふ。籠（こもる）ること。ハ今（いま）ハ。ふ敵（てき）ふ。進（すすむ）ること。ハ推進（おしすすむ）と。推捉（おしとる）と。号（ごう）ス。の声（こえ）。山（やま）も。崩（くず）れ。谷（たに）も。埋（うず）まる。計（はかり）ふ。所（ところ）て。帰（かえ）ってもまくこと。ふ。ハ。彩（さい）ハ。開（ひらく）もいろ。ふ。ハ。ら。ん。と。軒（のき）て。惘（ひねる）ること。ふ。ハ。日根野（ひねの）と。牛牧村（うしまきむら）ふ。ハ。北（きた）く。城中（じょうちゅう）ハ。意迫（いそぎ）。慌忙（こうぼう）く。若（もし）と。ふ。ハ。ゆ。宿（やど）め。て。謂（いう）ふ。歌（うた）。軍（いくさ）ふ。く。推進（おしすすむ）ること。ども。遠（とおく）城堅（じょうけん）固（かた）ふ。推（おし）

容易く落城せべうらなど。もとより此境ハ嶮守なれば。忠義強石の係く
ゆゑ。一騎當千の勇士なれば必死となりて防がんハ一月二月い寄城なべし。
然るうちハ敗軍の自兵も多ひく集らん。又江刈の淺井長政の叔
母近江御方ハ秘奥の宝家なるよし淺井記ハ云
を君と親しく江州御者なれば。よも関捨ハいとこうらなど。
しかるうちハ援兵なべし。左右と待るのあらば。尾刈勢も懇屈して必定
変をなすべしとうらハ敵兵ハ心を寄じ。日根野兄弟牧村長井ハ二丸
ハ出で防禦せざやと自兵を率ひて構へう。時ハ織田家の先陣なる
柴田権六勝家一千余騎ハて攻寄せべ。續て滝川一人氏を勝ち
千有余人次第ハ〻ハ寄来。官僚ハ落城と見へうる
木下藤吉郎秀吉親族尾擒猪　属警護城中
窮鼠ハて猫を噛。とハ孫子の作。修羅軍。天敵ハ烈なさ

きて強圍山ハ敵ハ逃るが如く。大石大木路の塗退へつるべ防せべ。得の柴田も
ちろうと思ひし。二人氏交代りて。破竹の如く寄寄せる城中より精兵四五百
騎を放ち出て射竟隙際あらせず防禦ハ〻ハ負ハ敗死人おびく
して。進ませしもなを得ざこと書四番入まりて。攻寄どく城中ハ。
強る寄兵なれども見へず。進ませのを撫ふうう。右左ハ日暮暮れべ。
夜軍なるも詮なしとて。心ならねど尾刈勢。柴の陣へ退迯せべ。城の兵士
もこれまこと退なべど。又翌日も寄来る。弱うう。軍弱兵ハ小ずども実ども名ハ負ふ
要塞の城なれば。更ハ強づきけ〻紀も安〻て。其日も徒ハ退きうう。織田勢
要ハ相遠〻玉ひ。呼甲斐ぞなきこ。軍の攻風ハ手ハ向ふて攻落さん。
と本陣を城ハ構へ稱〻。自分ハ立烈火の如く。指揮〻〻べども城中
ハ兵石千分ハ賜へなべ。甲斐なして不當日もむなしく軍を返〻

こう。這响秀吉御前ハ出一文演を守る時ハ万卒當りがたしと意
ちがへ。二日彩の如くふして力攻ハ素さ多くふへ士卒を挽ぞる緯多く。勝利の
益も覚束なし。也益ハ軍士を労せんより。姑く攻落を緩げたまひ。然
よく勝利の図を計ら。然して攻入玉ふべんば勿を急ハ落城を多ど。
と言狀を。ハ信長も。智者の末ハ下ぐりふを到而謂あるべしと思され
しうべきもの攻にと思ひ出ひ。諸軍を休息せしめて后信長ハとかを
がしけん。行中重治を呼よせ多ひ。是ハ當國の住人ハ。久しく這城ハ
出入つまび城の案内よく知らんいうある方御を設多ば這城を攻ぬ
きぞ。ふまのあらば教いらまよと命せハ重治然ば候。就奥就城の御あき
ば。織田家ハ攻撃の謀あり。双方の文遍反ハ切候のうへの事多まば一應の庶
忽めて簡を言狀をる緯ありがたしと答ふ。ハ織田殿ひとハもつ不候のそ乳

ありしが末ハ行中が意中を悟り。重治を閑而ハ請し。剛を巧ハ言ふをあり
元来當城を囲む事ハ就奥の企を通を誠め長の途を衆ハ困しむを。
故ぞんこめの事言あり。頼て足下と約束せし。就奥の余請あらばハ
家藤家相續の事。せ久ハ二九を取て后。授を客ん。と為ぞまども就ハ入
べきを諸條。いさうハ不審の石候帰くハ其大意指ハ玉へと訊ねるを〈重治
黙止ハ遁ぬ〉長良の閑道を教へ〈う。稲葉山の毋屋の方ハ長良川まり遠流とハ 末ハ
こ見を所ようも。恩余を翻して大ハ歓び急ぎ我陣ハ帰り浅野ハ
と情ハ拒絶。明日こを這城ハ一番乗を為ぞ。當陣の事ハハ一番
秀長ハ任ぜべし。海ようく凝を補佐して。諸士ハ時号を通ぜべし。意
の随ハ撫遇を拵ハ遠就をして笑ハ結着。時号の
鎧ハ着ようの攻授べしと謀合せを張ハ陣

小兵衛なり。大将の所耳近くさし俵て。密事あらくを言はゝ、そりゝ矛と
翻しと指揮する自軍の勇士蜂須賀小六。仝又十郎。加藤田集人。稲田大炊助
青山小助。日比野六郎兵衛此俵の六人を自分と加て。俵を七将燥き兵粮と俵を
屬山中渕岡の準備を後の暗号の事あらくを。一斉あまりと聚ふべき。一方
瓢を酒と盛ることを背負て。身軽を小将是。八月十三日の申の刻より長良乃
浩へ馳さかり。又秀長と淺野とを。木下の陣不と固く守り。屋敷とを藤治
て番号の瓢の出る緯とをまくと。後をそう。然れどに木下藤吉郎秀吉へ。
長良の渡を徑を渡て。測ることく行程を果して。瑞龍寺の峯づゝひ。彼山
を渡らば城の東小背門の麓あらんと思ふ地方を。そこども。演渡ある事
言べふ。此嶺と越んと欲するを。者の翼と得ぞんを。彼木下
らんと欲するを。猶の疑をんが得ぞ如ないせんと。遍互を義と思と。後合を

の。悩まて。霎時佇立しが。奇俳の不思議を得らし木下。杖を清を叢を
うひ。弱索とさげて。榜子を撫東西を幸ひ。漸く一隙を。そこ
の兵を。樵拳警り。遠を。刻を。次を。腰を。芸を。出を。背負を。瓢を
こを。郎を。或を食を。或を飲。悩使憩を。立を。機を。も。寒を十三日の
早旦を。月光を。ふを。て。畫を。出く。笹を。隈く。樹を。指く。光を。羅を。仔細を。
遠を。ふを。を。紀を。京を。と。個く。奥を。と。儀を。和を。意を。詩を。西を。流を。間を。剣を
謀を。く。公を。鼠を。所を。七将。儀を。耳を。聳を。目を。瞬を。像を。色を。山を。蓋
撫を。親を。徹を。と。孫を。憤を。と。猪を。窟を。苦を。ん。て。異を。出を。木を。根を。岩を。角を。
を。任を。刎を。刺を。突を。崩を。猪を。恐を。狂を。乗を。弦を。緒を。一を。個を。の。侍を。逆を。ん。と。
て。大を。喝を。一を。声を。叫を。ん。で。猪を。と。呼を。返を。と。こを。と。ん。ら。より。七将。を。食を。不を。審を。を。
徳を。孫を。山を。猪を。遁を。ふを。実を。尊を。常を。は。獣者を。ら。じを。ひを。ふを。も。ふを。細を。あを。の。を。

秀吉
肱股の
勇士を
率て長良越の
嶮崖を躋る

らんと。頸上の岩ふ攀滑り。人と獸と競守生るに。彼壯士あまたの像く。
滑くさる悪石と事ともせず。跳越く蕃柔る。猪いこまふまちく怒て。
牙を磨し蹄を漫。彼壯士ふ跳蕃る。形虎窟空と身を翻し。四五人の者
(壹過)し。虎陪と窺ひ猪が脊ふ。飄然と乗る。猪いまこ見を奪さん。
と大樹岩石ふ躍を歩著。右横左横ふ走る。輝涙賀又十郎見て慌へ
ろね。猪ふ猪と擬止て。彼壯士を助けでやといふを本下割し止渠い定て
見つるるらじ。驚力を試ととおぶ(へ)るぞ。且俺們い大事を抱て身をるの。
と。と辞さで猪も獸と人の遠果いふと片津を含。おやと看る間ふ彼壯
士。右手ふ野刀抜徳申。身を出づまを猪が膳を馬殺と撥徹し。力ふ信せ
て究るみどふ。當猪の獸も窮石ふ堪る。間呼んで手傷ふ天腹地背を
例きこう。然るふ方僕を傑きを。彼壯士も共ふ例を息絶しふや

起るもあらじ。本下(こまを)とりんるとうも。驚しこて起舉り。彼壯士ごとち拳動。
實凡人とおりんまこを。怯勇士を獸と共ふ。驚しもることの不便さとそ。
き傷てよくく撫まを事ふ猪を制止つまども。たゞふ尾束を禁と拾ま。
まるちもやらで問絶せり輝涙賀。稲田こまを(とん)て助起さんとまを。
すこみまこを。こまを獸を刈さじのめと一徹ふ捲殺るを。渾身の驚力統ふ
凝居し。力をぬのめと思(へ)ふ(ま)を。本下教てめりるを。刈まを凝固し。
拳を出方ふ比敵さを指打皮肉爛をみどして後の患を記紀きんふ拾
し尾束を侵切取姑く息を休まを。腕を温めつさを心律りてをのるら
五指の筋骨延縮。鬣さくのめを。教ふ稲田力を抜て尾束を截る。後言郎
ハ欲殘せし。戦の酒を口ふ賤ぎ。果を
潔く息出国を貯く。遥响本下ふ倩てみいふる峯ふまを。夜中も獸を

秀吉主従
鳴葉山の
脊路を
出るの
中途

偶然
堀尾
茂助が
怪勇を
視る

其二

せし一人、徳る深山に分入て、免き所作をなしつるぞ。勇力骨法実ふく惜し。乱まさる世に出るならば大國をも柄の者ともなるべし。血氣の勇に慢る律思慮なき紀中にあぶゆるなりと、諦の言に彼壮士が荒木と笑みて漲き。その御不審は理なれど、杣家が身より足に逢しぞ。何國何雖なる人やして遠山中ふいりましぞ。卉も遠き深山嶽谷に、杣家が常の住居にまし。又遠所作を活計とせなまじ血氣の勇に慢るにあらねど、今日昨日も又一昨日も免き所作して當日ろくを過せる者なり。原杣家の性にもあらねど、聊か不意の事ある時へ力を自試し筋骨を練固んとおもふによりて、山奥へ降遠地に棲居る猛獣に出逢ふが剋を出や嵐にさへも敵をもて運を試んと心の所願今いま来や。満足すべき験とうんへて獣は左右なく剋止るとども、勇氣さめて息絶んば豊恥しの挙止やと譚らちちに饒の筋よりやく繿りて擬りる。猪の尾を據まりて、壮士おもひ予ら喜び。

單衣しと帛を解退て指を動し試るに、掌中紀にありつるのとみて。些も過失あらざる由へ、盗摧拭そて七士に傚ひ、恭しく扶抱の恩を謝し。恭しく稱譽その腕未だ落ひ韜らく。我の如れ深山中にて、端なく壮士に値偶こと、必定宿世の奇縁なるべし。然ば智合人ゝい一方ならず思ひもし。又思ぶるも甘ぐれなり。今もその心中に願ひをこめて我に事し所い良主に仕へて身を立んと我願なしつるものなるらん。唱ふくそろ意を識てまで、意中をば隠さで語らましよ。我のふ唱へ清洲の侍士木下秀吉といふ者なり。子ハ往日岩倉にて猶官に仮合しからぬ擔ぎして織田殿の団を籠る也し仁君あらなむ。俺們今宵拙路を寄ち遠霊まで来りしハ此城の背門へ飛報投んがさめなるぞ。子を罰せんとならば今宵なれらも功首せよ。宜く擔挙すべきなりと、韜を解く听ぞのち。儕い織田殿の衛内なる木下大人とて、測服深くそ一家に築れし人なりと聞居の風説に听つる

が足下にておはしますぞや。いかにも我は御推察の如く。岩倉の仁王にて候。郭中
さば清洲殿にも知らしめさまん。然るときは孫織田殿に仕へ奉らせし由緒も
あれど御ぶかる癖ありて織田家に奉公をゆるさし。其縁にて縁故をもて詳に
さば小子が父忠右衛門。寡々浪牢となりつるを岩倉の城主。伊勢守殿召出されまし
て浅からぬぞ。不便を加へたまひしに然る恩ある伊勢守殿。武蔵守に一味し
たまひ。清洲を謀りまゐらせし事露顕して武州殿は織田殿に代りたまひし
うども。勢州公へ仕しまつるぞ。孫清洲と左右見て観く。岩倉城に籠守まし
が。討れずと魂を悪ひてあひ世を畢たまへども家筆の人々遺言を守り
岩倉に籠城せしかど終に織田殿に攻陥され。諸士退散の群に入て。栖家
親子も零落し。遠国の知己を情に。浪々の内に暮しながらも勢州殿
の恩義を懐ひ。父が武道の意地を貫きて二君に仕ふる詞をせずぞ後世を

に身を任せて。一両年を経るうち父忠右衛門も相果ましぬ。名を塚原茂助と
革め今は盲目孤の小子なりといづれの君に従ふとも心の随なれども父が苦
主の敵たる信長公に仕へんことは義に背くと思ひ寄ず。然れども今宵命の抱
の恩に報ひまゐらせんため此より城の間道を導きいたしまゐらすべしと謂に
木下義心を感じ。再び奉公の事は勧めずぞ案内を偏に憑むなりと望に
茂助こそあり。此より城の背門までは一倍険しき径なれども御心易く
おぼしめせ。我等導ひ到る者候がせん先登いたし候はんと。帯締整へて
起騰までは七士かいて殺しく蹤に続くを木下指揮して時刻若干を
しぞ急げやいそげといふ程に蝉次貫親子青山稲田茂助が撃つ
満ぬる。樹の根岩角の蔓蔦に縁る嶮しき難所なれども案内は熟さ
る茂助なり。七士は軽捷の達人なるまでは嶮難縄辟ともことともせず二時を

木下の勇士等
大樹を梁とし
稻葉山城中へ
襲投

り是に過る間に絶頂にこそ登りけれ。此峯より城中を観卸せば。究竟掌に把る如し。木下よく〳〵顧ひ視るに背後は要崖を憑にして守る兵士も更になくも懸てりよく〳〵意寧しと堞を當てぞ走下るに。這道條は難所もなく剰下行歩は遶道なれば道に饒く。聴城際まで著られる。途にて頃刻休息し。城中の譟噪を窺ふに絶て小柵を結塞しを裡には敵を構へ。あまた人の雑兵が火を焚余して候調居り。木下これを得と洸観し。青山小助を呼で謂ゆう此所は足下の能する所ぞ。潜入て斬くせよと小語告るを小助は諾受つ隈を傳ふて忍入らんと構上を得と観巡すに柵も大ならず隙に繞く。外を囲匝まる溝ありて流るゝ水も淺ゝと底明に見ゆれども絶崖高く聳て將難にをべき所なれば。いかに儆むやと溝越かぬるを後より声をかけ。橋を渡して参らすべしと謂まゝ傍邊に生植る松の大木に双手をかけ引抜とする小蜂

須賀加治田力を擧て一搖二搖左右なくこれを推倒し。手便溝へ歩趨まはれ弱もあらざれど一條の獨木橋とぞ成得たる。青山小助うち喜び意得ぬとこれを傳ひ直に柵を攀越て雑兵が城中に潜び入。東隈西隈を顧視て。まぐ兵糧を炊ぐ所に到れば夜はいまだ丑を過ざりけれ。十人ばかりの雑兵們善悪ともあらねど熟睡して性命も知ぬ如に復寝の鼾聲夜と共に高く響り。飯筥採て椀おしあけ肴べるものとてはなけれど粑うち混ぜて飯は残らず得られと抱へて自持せし柵の側までのち来り。一弾指して摽くを聞くより木下は主従八鉄なる大樹を一齊に渡し柵を越て内に投ぐ。小助が奪ひし飯釜を八士八分に分ち闇に操る色なく喫しすて。然して木下再びこちあり各々肴を遂へ道こそ遠けれを飢に得らりし頃は遠所にも戎衆を備へしと見へて。衛壓制壓の礎の見あげたる要崖にも稍に心せり。僅道との規則を守らば此所にも守兵は四五百人隊列を

立て構へるあらん。然はさまで我々あふとして。謀略をとい得ざらんで叶事難の運の澆漓や。遠作あるべき面目なき行とも。意寧ろ〻べし。先く怪備せよやとて。領内往奥さらし。秋葉宗の徒標など操出し。八人一命こを彼稜ふ山の雑兵が兵糧まこが作とみ。兵糧殿より鉄槌持出。こを石厳の外面小積ぐる。紫葉蔓の正心へ火薬とあまく燈撚量より以時分小燒出べきやと。十四五間面小伏屋で。遥かの方へ走り出

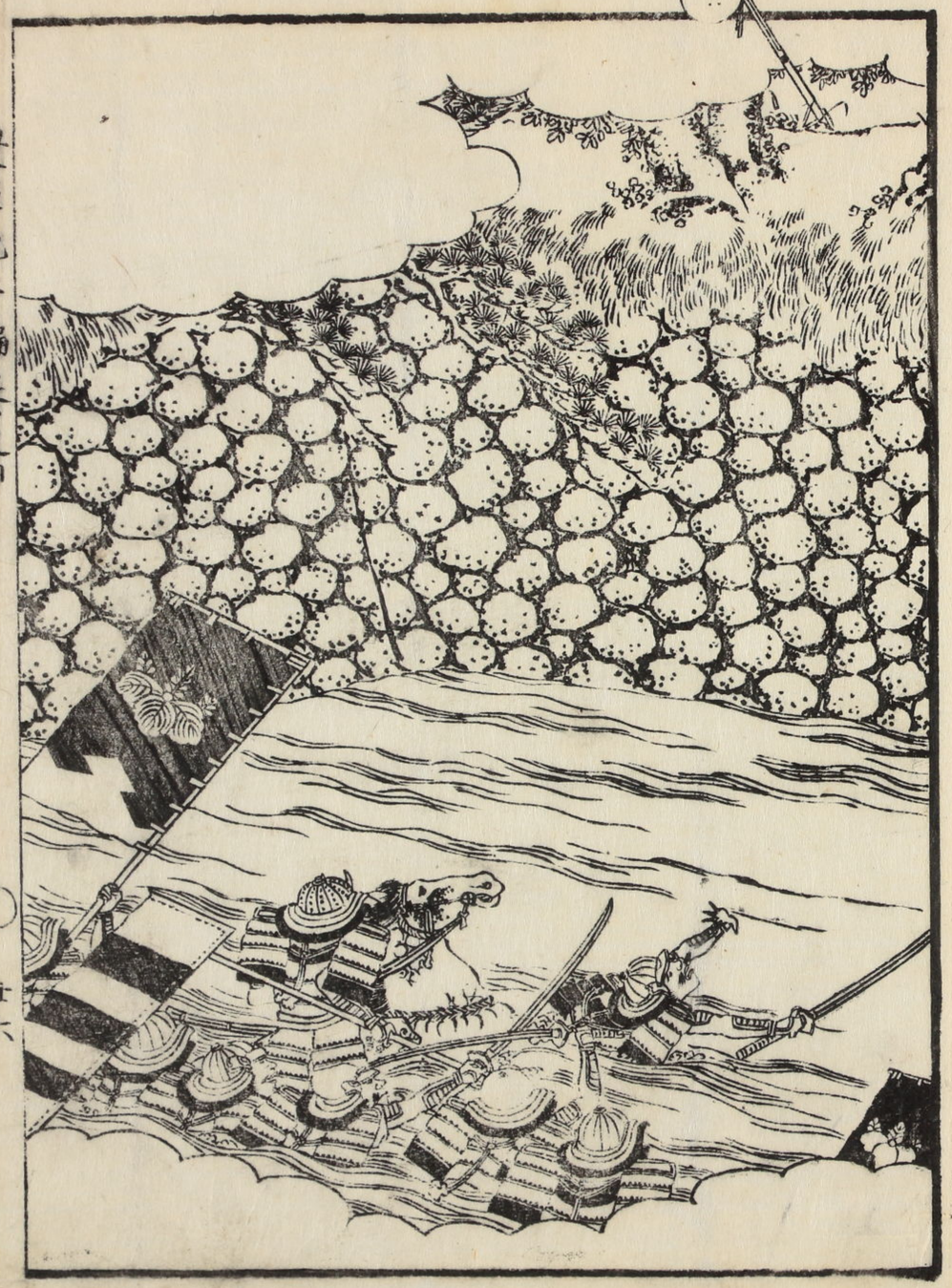
本下八士焼兵糧彼溝門一属激葉二九

千丈の堤ぐも蟻の孔より崩るとか。信しらぬやうふ所しゞ宮僕背へよう警投る。將ふぐうふ八人ゆまども。本下が智恵忽意じて。火ともあり水とも有り。数万の兵士が貫穿ふて。籠る遠城を。夜嘆るひまふ顛さんとか。古振るくぐそなう。然ふどふ城尾義助い。惜の外まで案内せんと本下ふ約束せーゞる。

遂誘引て柵を。まこへ。ふりそで城中小潜投ぐや面関ふぞ向ふ。義助人をき不と行て。七人の者を呼ける。仇抱を受し。報恩小。城の外まで案内せんと。ふ約束きるしゞ人兵糧を。飽まで喫し。腹痛をるこを恐小。報さんさめの御使をしこまもでさつふ仕る道ぞとうち戯語を本下所て。一粒百倍とこそひふるき。勿々そこい等閑の擾ふてい偏ふまじ。粉骨砕身せぜんばあらじと。笑こぶちて行ける程小。復而こを。雑ふ言ぬり。二の九面関ふ到て。視まば。鎖鎖の宮ち口隙く。伏く有係小備構いあり。ながら。吹今軍を止まべ。將軍心ゆるこそや。善悪も知らぞうち。卧しる。池鄙の澆漓とよつく。沈視し。面関の門を。家ふに。鬼瞰固く。繋こまべ。編をして。用ぐし。斗たの方を。視て。まこべ。面清の水を。堰。最高こる。溝門あり。此ハ兵戸を。雖せしのこふて。鍵ふも。漏わも。用ゐまべ。此門より。攻撃小。心寧しと。思決めち。速小。旁号をまて。自軍の軍を。招んぞ。

と例の鯱と笑ひ結篇。據より高く鉾揚らり。無しく木下七士ハ指揮す。
今こそ雄氣を用ゐる時なれ。這溝門の戸を開よとのふに心得輝次賀父子。
稲田喜三山崎尾の人々。水中ハ逃入々々。各壁戸ハ双ほと撫肩りて横ゝ面り
揚揺あげ。七人一齋の金剛力ハ難なく溝戸を紀伊守ども面目を守孝
る。制止の名士綱より。這八人の個くゝ自軍の雑兵と懐ひをしくべ。水口の戸を
開るまでも更ハ心の點ざりしが。這拳止と視るとも半ハ怖き半ハ怪しこの九
溝戸をひ紀開しぞ。就ては人將の指揮ハ有ふも煙紀茅動や謀
殺人の事ざらんか。拳捕て藏る案せんと米ハ紀藏る機会うらふ。山上
なりまも爆ゝとして紳者くやの高や黒煙。天を焦て霞掩まべ。本丸おひふ
慌忙き奥ハんで噪起ハ二の丸ハ備仕し諸將達軍のも取移ぞ。山上
當て弛警る。這騒動ハ本下ゲ。兵糧一厳ある緊急ハ。

機会こそ一日千金。ハ山崎の光破天と到ハ火炎。鯱ハ焼競て。構連
制解。公解ハ諸ハ時ハ燃抜り。本丸ハ本丸ハ。ハきて火焔上敵ハ溝ハ
陽げんとなる。水激く火勢ひく。機会ハ。女性幼稚ハ逃ハ惑ひ泣叫ぶ
声の木魅ハ响紀ひその外の騒動ハ。墨ゲさめハ溝門の煙紀事ハ金ハ
者を索西ハ散南北ハ氣を歸殺てぞ怪を。信る石ハ面関の外面本下
の自勢八百金銭。ハ小弾秀長。正勝ハ進ぞ弛警る。信号の鯱と
視るとも。顧ハ搦手の個をハ力と勢せよとのふと一斉。指と叩ひて共を上とき
まべ蜂須賀ハ正勝溝門の水戸を實出。自軍と招ハ各意得こと。
溝とうち敲。正魁ハ進をし力士軍。橋梯うち揮溝ハ。面関の城戸を破り。
喚叫ぶ乱投。城中の名軍ハ。ぞ繼火ハ家を焼きこと遠ハんのも
ぬく。兵本丸ハ紀退く。大濠ハ弾を無こと見て。遠揺ハ破をるぞ。



蜂須賀蜂尾
稻葉山の水門を
開て西方の水下
勢を導入る

小一郎に續けや者共。進めやすゝめと指揮なすに少しも。破竹の如き勢ひなし。喊て
声して突掛るに續ひて柴田。森。池田。坂井。前田の軍勢。怒濤の如く
暴雨の如く。有数に聞き稲葉山も崩るべき有様にして隙間もあらせず競入
しかバ。今や二の丸ハ織田勢の受代りて勤めたり。日根野兄弟牧村等。本丸口を
断切て。命期に防戦しけるが。今僅ハ此門にも止らず。疾本丸に退入て内を堅
固に護るべしと。長井牧村をさしまねて。一ひしく本丸へ退陣するを。進みへ
こゝぞと一励を争ひつけ入にせよとて進行を。木下固く制し止。軍ハ不分の勝な
きに。退く者を追べからず。二の丸を固く守れやと指揮に各々心得。敵
方の残兵を。雑兵までも追散し。五十余棟の番所役所を悉く奪ひ
取。凱歌を作て威をしめし。各将ともに休息せり。偖本丸の敵中にハ。敵
兵。漸う今ハこれまで。斎藤右京亮文龍興。背門の火にも驚き。魂も脱せし如く。惘果てぞ

見へたりけるが日根野兄弟。長井牧村。一度に本丸へ来るを着て。蘇生たる
心地しつ聊か安堵なしつれども。背門の火勢いよく烈しく。迚も防ぎかん術も
なし。剰進軍ハ二の丸まで乱入る。残るも脆に隊伍も嶮しく。勤ても自滅の
外なし。粮一粒ハ全く焼失せしによ。然ハ焼ぬまで当座。兵糧の粥を炊ぐ
べき準備もこゝに至ては雑兵皆ん返ねし。宿老ホに遠路に息で、思も
漸て攻られんにハ忽落城するべしと。頼て行中の重臣と相談し。詞のあるを以て
急ぎ本陣へ参候しけるに

絵本豊臣勲功記二編巻之四 終